

Title	大正末昭和初期創作図案浴衣企画ブームの位相：注染浴衣による江戸の意匠文化の継承と近代的図案観の受容
Author(s)	大久保, 尚子
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 46-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91060
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大正末昭和初期創作図案浴衣企画ブームの位相 注染浴衣による江戸の意匠文化の継承と近代的図案観の受容

大久保 尚子 宮城学院女子大学

はじめに

近代東京の地域産業として発展した中形（型染め）浴衣の意匠は、浴衣自体の位置づけの変化、新たな染め技法の台頭とともに変容したとみられる。その中でも大正末、昭和初期に出版メディア、芸術家らによる創作図案企画が相次いだことが注目される。雑誌『主婦之友』における読者公募図案による〈主婦之友浴衣地〉がよく知られるが、当該期の雑誌、新聞記事を調査すると他にも様々な事例が見いだされる。大正12年（1923）から昭和6年（1931）頃に集中し、①画家、工芸家、歌人、小説家らが参加した芸術家団体による企画、②雑誌、新聞等出版メディアによる企画に大別される。②は商業性が強いが、一般からの図案公募や人気画家、挿絵画家、小説家らによる図案、創案を特徴とする。つまり①、②いずれの系統にも染織専門の職業図案家ではない「アマチュア」の参画という共通性がある。本発表では一連の事象の起点とみられる芸術家団体「草の葉会」による〈草の葉染浴衣〉、多大な影響力を持った〈主婦之友浴衣地〉を取り上げ、図案創作に対する意識、図案の性格を捉え、この事象について考察した。本発表に先立ち東京中形浴衣の技法の近代化過程を検討し大正末昭和初期は注染技法成熟期にあたる事が確かめられている¹。以下では当該期に至る東京中形の図案制作動向を確認した上で、染め技法の選択にも注目して〈草の葉染浴衣〉、〈主婦之友浴衣地〉の具体的様相を検討した。

明治から大正期、東京中形図案制作の動向

明治30年頃、日本橋の伊勢型紙問屋の浴衣図

案描きを体験した鍋木清方の回想によれば、型紙商は画家に描かせるなどして調達した図案で新型を彫り東京中形問屋に納めていた。図案を型紙の素材とみる商習慣は昭和期まで残存し（聞き取り調査による）、優れた作品、製品の基点として図案自体に価値を置く近代的図案観との相違が指摘できる。また幕末来、人物描写のための「模様描き」を修業していた浮世絵師たちは中形浴衣意匠への関わりが深く、明治初期にも浴衣下絵を手がけている。清方の例は画中描写と現実の意匠が近接する関係の幕末期からの継承を示唆する。

一方、明治30年代には、東京では中形浴衣が広い層の家庭着となり流行商品化、同時期に合成染料を用いた写し染めなど新技法も登場、図案研究の対象となり始める。明治40年代初期にかけて大手呉服店等による中形図案懸賞募集が盛行したが、型紙業者、職業図案家を主な対象とし販売者が評価するもので、これらの点で後の創作図案企画とは異なる。盛期を過ぎた大正5年、白木屋の事例では入選者に型紙業から派生した中形専門図案家や挿絵画家高島華宵が登場し注目される。大正末昭和初期創作図案企画の検討

東京では元々手拭染め技法であった注染の浴衣地への応用が大正期に進行、大正12年（1923）の関東大震災後には東京中形浴衣地製作の主流が長板中形から注染に急速に転換した。同時期、生活文化、空間の近代化が進み、これに適合する意匠が模索され始めた中、創作図案企画が登場した。草の葉会〈草の葉染浴衣〉

「草の葉会」は佐竹弘行が創始した創作図案に

よる染織品を制作する芸術家団体であり、〈草の葉染浴衣〉は大正12年(1923)から昭和4年(1929)まで確認できる。参加者は画家(日本画、洋画、挿絵)を主とし工芸家、図案家は少数であり、芸術家としてのアマチュアリズムの意識がうかがわれる。商業企画を離れ芸術家としての研究的姿勢で沈滞した染織界の革新を目指す意識が参加者によって語られ、アーツ・アンド・クラフツ運動に共感する雑誌『技藝』から支持されている。図案には画家たちの画中意匠のような自由さが認められる。初期には注染によるものは一部だが、昭和4年には全て注染となる。同年には新メンバーを迎え「断髪や洋髪」若い女性に向けたモダン意匠が試みられた。型送りが長く、太めの線が適する注染技法が大胆な意匠に適合したことがわかる。

〈草の葉染〉以後、追隨した芸術家団体の企画、〈主婦之友浴衣地〉をはじめとする出版メディア主催企画が続いた。「草の葉会」参加者の一人、鏑木清方は一連の機運を起こしたのは草の葉会であったと述べている。芸術家団体「くれあむ会」(大正14年発足)、「藍々社」(昭和2年発足)の例では、文芸的考案や、「余技」の意識などが特徴的である。藍々社にも参加した清方は東京における手拭、浴衣地誂え染めの文化、また意匠創案を遊ぶ江戸文化の延長上に図案創案を捉えている。

〈主婦之友浴衣地〉

〈主婦之友浴衣地〉は大正14年(1925)、創刊八周年に際し読者公募図案を製品化する企画に始まった(図案公募昭和6年1931まで)。募集要項より①「日常生活を心地よく美しくする」目的意識、②「素人」、生活者側からの意匠提案、③図像として完成された図案に限定しない意匠創案の包括が目に見える。①②は生活者の手による生活の芸術化と捉えられ、③は受容者が意匠創案を楽しむ文化の継承を背景とすると考えられる。この企画の性格は「草の葉会」メンバー藤井達吉と鏑木清方を中心に据えた(ともに第2回以降継続)審査員人選にも反映されている。『主婦之友』に図案

指導記事を執筆、「芸術の生活化(あるいは生活の芸術化)」を目指す「可志和会」を立ち上げた藤井にとって、素人による図案創案、これに基づく浴衣地製作は自身の主張、活動とも重なる。一方清方は江戸の意匠創案の文化の継承を意識していた。また「素人図案」による企画は東京で受け継がれてきた型紙業、図案業による図案修正を含む手拭、浴衣の誂え染めの仕組みを前提としていた。

本企画は注染を基本前提とし、その標準を引き上げたと評されている。入選図案は植物などの素材を展開したもの、童画調、前衛美術調まで幅広い。誌上で提案された洋服や室内装飾への応用も視野に入れ評価されたと考えられる。一般人(主に女性)の入選が中心だが職業図案家の応募も多く、産業界からも注目されたとわかる。「質に於ての進歩も著しい」とされた第5回昭和4年(1929)にはモダン主題に注染の大胆な構図と線が生かされ、審査員作品もほぼ注染となった。雑誌の広報力を基盤とした本企画は「ゆかた」の全国流通にも繋がった。

おわりに

大正末昭和初期創作図案浴衣企画は商業企画と距離を置く芸術家集団「草の葉会」の取り組みに端を発し波及していった。「草の葉会」、「主婦之友浴衣地」関係者には生活の芸術化の実践という意識もうかがわれるが、アマチュアリズムの背景には意匠創案を楽しむ江戸文化の継承もみられる。これらは従来の商業企画にない新鮮な意匠の試みであったが、実製作は型紙業に近い職業図案家に支えられた面もあったとみられる。生活文化転換期にあった人々が選択した新傾向の図案は、完成度を高めた注染技法と適合して注染浴衣地の新局面を生み、産業界にも影響を与えたと考えられる。

註

- 1 拙稿「東京中形浴衣の近代化と注染の展開——同時代化する手仕事」『宮城学院女子大学研究論文集』134(2022年6月)